

暁遊詩集目次

<p>漢詩の持つリズムを感じながら、できるだけ日本語らしく心をかけて訳してみました。</p> <p>一 孟浩然「春暁」(春眠暁を覚えず) 「春眠暁を覚えず」で有名ですが、ただ春ののんびりした風情を歌っているだけででしょうか。</p> <p>二 蘇軾「春夜」(春宵一刻直千金) 春の宵は、現代ならどのくらいに値段になるでしょうか。ついでに調べてみました。</p> <p>三 孟郊「登科後」(昔日の齷齪誇るに足らず) 試験に合格した後の花見の楽しみ</p> <p>四 耿漳「秋日」(返照閭巷に入り) 芭蕉の俳句「あかあかと 日はつれなくも 秋の風」は、この詩が元になっています。</p> <p>五 杜牧「山行」(遠く寒山に上れば石径斜なり) 秋の紅葉は春の花にも負けない？</p> <p>六 李白「静夜思」(牀前月光を見る) 月の光が白く光つてまるで霜のようだという感覚が、新鮮。</p>	<p>1</p> <p>3</p> <p>5</p> <p>7</p> <p>9</p> <p>11</p>
<p>七 菅茶山「酒人某出扇索書」(一杯人が酒を呑み) 「三杯酒が人を呑む」わかつちやいるけど……。</p> <p>八 張九齡「照鏡見白髮」(宿昔青雲の志) 鏡に映った白髪の自分を見るにつけ……。</p> <p>九 陳子昂「贈喬侍御」(漢庭巧臣榮之) 「武骨な一線かやのそと」</p>	<p>13</p> <p>15</p> <p>17</p>

「春暁」(春眠暁を覚えず) 孟浩然

「春は曙」

AKY訳

「春は曙 何時までうつら」

軒端雀のにぎやかな

憶おもえば夜中に雨風の音

桜はなも散ったか おおかたは

(原詩)

「春暁」

孟浩然

春眠不覚暁

処処聞啼鳥

夜来風雨声

花落知多少

(読み下し文)

「春暁」

孟浩然

春眠暁を覚えず

処処(しよしよ)に啼鳥(ていちよう)を聞く

夜来(やらい)風雨(ふうう)の声

花落(はな)つること知る多少

「春の明け方は、気持ちよく、いつまでもうつらうつらしてしまおう。」

のんびりした春の境地をうたつているようですが、第三句に突然「風雨の声」がして、第四句の「花落つ」と続くので、この詩が、ただ、春の風情を愉しんでいるだけではない、春の風情を愉しんでいるだけではないことがわかります。

孟浩然(六八九〜七四〇)は、何度受けても科挙に及第せず、失意のうちに郷里に帰つて隠遁したといわれています。もし、科挙に合格し、宮仕えの身となっていれば、たとえ、春の朝とはいえ、うつらうつらしてはいられません。当時では、高官に成るほど朝は早くつとめに出なければならなかったそうです。それにひきかえ自分は……。うかうかしている間に世の中は、どんどん変わってしまった。もう自分の出る幕はないのではなにか。第三句以下には、そのような気持ちが含まれているような気がします。そういうえば第二句の朝の鳥の鳴き声も、「いい年をして」といろいろ言われている近所のかみさんたちの井戸端会議のようにも聞こえてくる。

この詩には、松下さんのほか、井伏さん、土岐さんの訳があり、どれもそれぞれの方らしい訳ですが、わたしは、わたしなりのイメージで訳してみました。

- 曙：曙は、原詩では、「暁」となっていますが、「春はあけぼの」という枕草子の一節を使いたいと思つて調べてみました。『暁』『明(あ)か時(とき)』の「転」夜の明ける頃。東の空が白み始める頃。古くは、夜半過ぎから明け方までを指した。【曙】夜がほのぼのと明ける頃。暁(あかつき)の終わり頃。『広辞苑』とあります。それなら、むしろ、この方が後の句への繋がりもむしろぴったりです。
- 「多少」この場合、多少は、多いという意味。少は、添え字で意味を持たないのだそうです(駒田信二、「漢詩名句はなしのはなし」)。

【参考】他の方々の訳詩】

「ネムタイ朝ノユメゴコチ」

松下緑訳

ネムタイ朝ノユメゴコチ

チユンチユン雀モ鳴イテイル

昨夜ヒトバン雨風アレタ

花モヨツポド散ツタロウ

土岐善麿訳

春あけぼののうすけむり

まくらにかよふ鳥の声

風まじりなる夜べの雨

花ちりけんか庭もせに

井伏鱒二訳

ハルノネザメノウツツデ聞ケバ

トリノナクネデ目ガサメマシタ

ヨルノアラシニ雨マジリ

散ツタ木ノ花イカホドバカリ

「春夜」(春宵一刻直千金) 蘇軾

(原詩)

「春夜」

蘇軾

春宵一刻直千金

花有清香月有陰

歌管樓台聲細細

鞦韆院落夜沈沈

「タイムイズゴールド」

A K Y 訳

タイムイズゴールド(黄金春の宵)

月は朧に花清(さや)香(か)

夜ごとの宴(うたげ)もしずまつて

鞦韆(ぶらんこ)夜風に身をゆだね

(読下し文)

「春夜(はるのよ)」

蘇軾

春宵一刻直千金

花に清香有り月に陰有り

歌管樓台(ろうたい)聲細細

鞦韆(しゅうせん)院落(いんらく)夜沈沈

蘇軾(一〇三四〜一一〇一)、字は子瞻(しせん)、号は東坡(とうば)居士、四川省眉山県の人。宋代第一の詩人として知られていま

す。
この詩は、第一句があまりにも有名。時間を金に換算するところは、現代的といえるでしょうか。

ところで、「一刻値千金」てどのくらい価値のものでしょうか。一刻は、時間の単位で、日本では、十二分の一(二時間)とされていますが、中国では百分の一(一日)だそうです。すると、十四分二四秒。これが千金すなわち千両に値するというのです。

宋の時代に一両がどのくらいの重さだったかは、よくわからないのですが、日本の尺貫法では、三七・五グラムと定められているそうです。ただし、これは、時代によって変動していたようで、江戸時代には、四〇〜五〇グラムぐらいであったらしい。仮に一両四〇グラムとして千両だと四〇キログラム、現在(平成一九年十二月)の金相場は、グラム三千円ぐらいなので、十五分弱で一億円を超えることになりました。日本の一刻だったなら、八億円。まさに「時はかね(黄金なり)」。そんなことから、タイムイスゴールドとしてみました。

第二句の「花に清香あり、月に陰あり」、これが、その一億円の内容。花は李か杏か、日本では、梅の花か、夜風に花の香が漂ってきます。月も煌々と輝く満月では深みがな

い、ここは、朧にかすんでいなければ。一寸前までにぎやかだった宴も、いまは、遠くで切れ切りに聞こえるだけになりました。「歌管樓台聲細細」のところは、「聲寂寂」としているテキストもあり、その場合は、宴の歌や笛の音も、もはや止んでしまったということになります。細細の方が余韻が感じられるように思います。

- 第二句以外は、名詞と形容詞のみで、あざやかに春の夜を表現しています。
- 「歌管」は、歌と楽器。
 - 「樓台」は、高殿。
 - 「院落」は、中庭。
 - 「夜沈沈」は、夜が深深と更けるさま。
 - 「鞦韆」は、ぶらんこ、江戸時代には「ふらこ」とも言った。中国では、女性の遊戯具として彩りも華やかな優雅なものであったらしい。

中庭では乗るものもないブランコが風に静かに揺れて、夜は、しんしんと更けていきます。

〔参考〕他の方々の訳詩

「鞦韆(ぶらんこ)ヒソソリ夜ノ庭」

松下緑訳

コガネニ喩(たと)ウ春ノ宵

花ノ香匂ウオボロ月

宴ノ笛ノ音モトオク

鞦韆(ぶらんこ)ヒソソリ夜ノ庭

土岐善麿訳

ひととき惜しき春の宵や

月に陰あり香るは花

たかどのかすかにもる歌笛

ふらこたれて夜はふけたり

「登科後」(昔日のあくせく誇るにたらず) 孟郊

「昨日のあくせくそれはそれ」

AKY訳

昨日のあくせくそれはそれ

今日の楽しみかぎりない

春風の中車に乗って

京(みやこ)の桜はなを見尽くすぞ

(原詩)

「登科後」

孟郊

昔日齷齪不足誇

今朝放蕩思無涯

春風得意馬蹄疾

一日看盡長安花

(読み下し文)

「登科(とうか)の後」

孟郊

昔日の齷齪(あくせく)誇るに足らず

今朝(こんちょう)放蕩(はた)思(おも)い涯(はた)無し

春風(しゅんふう)意(い)を得(え)て馬蹄疾(ばてい)はやく

一日看盡(いちじつ)みつくす長安(ちょうあん)の花

「昨日までの苦勞して勉強していたときのこと、自慢にもならないが、合格したあとの今朝となつてみれば、のびのびとして楽しくて仕方がない。過去のあくせくしたことは忘れて、今日は一日、都じゅうの桜という桜をすべて見て回るぞ」

登科とは、科挙に合格すること。出世して高級官僚になるためには、科挙に合格するほかはないのだけれど、合格率は1%、百人に一人程度だったといわれています。何度受けても落第を繰り返すものもあれば、七十過ぎてようやく合格したという話もあります。孟郊(七五〜八一四)もその一人だったようで、五十ちかくなつてようやく合格したそうです。気難しい男だったといわれていますが、この詩には、さすがにうれしさが表れています。

科挙の合格発表は、三月、勅許によって合格者は、王侯貴族の邸宅の庭を自由に回ることができたそうです。当時の中国では、牡丹の花が流行で、中にはひとつの花の値が中流階級の十軒分の税金と同じというものもあつたらしい。その時期の都の騒がしいことは、「一城の人皆狂うが如し」と書かれています。

合格者は、自由にそのような見事な花や庭を見て回れるということで、都中を意気揚々と馬で走り回ったということです。

日本だったら、さしずめ桜の季節の京都のようなものではないかしら。今日では、さすがに馬は飛ばさない、いわば、シーズンの京の街中を、タクシーを借り切つてみてまわるということでしょうか。

孟郊は、詩人としてはともかく、官僚としては、あまり有能とはいえなかったようです。仕事が無能だということで、官位を落とされたこともあつたらしい。結局、不遇に終わったということです。

松下緑さんは、下のように「昔日」を文字どおりに「昔」として「ムカシハシタモノダ」と訳しておられます。おそらく「合格してしまつた今では、数日前のことも遠い昔のように思える。」ということなのでしょう。

私は、「長年の苦勞が報われた。」という思いを、もう少し表現したいと思つて、「昨日のくそれはそれ」としてみました。

【参考】他の方々の訳詩

「昔ハアクセクシタモノダ」

松下緑訳

昔ハアクセクシタモノダ

今朝ノ樂シミ果テモナイ

春風ヲ背ニ馬ヲ馳セ

ヒネモス京ノ花メグリ

「秋日」(返照閭巷に入り) 耿滄

(原詩)

「秋日」

耿滄

返照入閭巷

憂來誰共語

古道少人行

秋風動禾黍

「秋の夕日の村里の」

AKY訳

秋の夕日の村里の

古道こみちに行き交う人もなく

侘しさ語る同行(とも)もなし

黍(きび)の葉だけがさやさと

(読下し文)

「秋日(しゅうじつ)」

耿滄

返照閭巷(りようこう)に入り

憂い來たるも誰と共に語らん

古道人の行くこと少(まれ)に

秋風禾黍(かしよ)を動かす

「夕日がひとけのない村に照り返し、わびしい思いがこみ上げてくるが、村の小路には、行きかう人もなく、それを語る相手もない。ただ、キビの葉ばかりが秋風に揺れさやさやと音を立てている。」

耿漳(七三四?)、山西省の人、唐の肅宗の時代、大唐十才子の一人といわれています。

返照、照り返しまたは夕日の光。

閭巷、閭は、二十五戸を単位とする村。巷は、その中の小路。閭巷で村里。

禾黍、禾は、イネ、黍は、キビ。また禾は、穀物の総称。

日本の村では、あまり、キビの穂が揺れるという風景は見られません。通常は稲でしょう。しかし、私の感覚では、「イネの穂が揺れている」では、豊年満作を連想させてしまつて、あまり、わびしい感じがでません。なじみはないけれど、「ここ」では、キビとしました。松下さんは、禾黍を唐黍と訳していますが、この場合、唐黍はとうもろこしではなく、コーリヤンのことであると注釈を付けています。

佐藤春夫さんは、素直に「禾と黍ゆれ」(いねときびゆれ)としています。

【参考】他の方々の訳詩】

「誰ト語ランコノ愁イ」

松下緑訳

夕日ガ村ヲ照ラス時

誰ト語ランコノ愁イ

旧街道はヒトケナク

唐黍(とうきび)ノ葉ニ風ガ鳴ル

佐藤春夫訳

村ざとに夕日照りそひ

わびしさを誰にか云はむ

古き道行く人まれに

秋風に禾と黍ゆれ

佐藤春夫さんの訳は、上品で素敵です。他にも多くの訳をしておられますが、どれもすばらしい訳です。

会津弥一さんは、漢詩を短歌として訳すという試みをしていて、歌集「鹿鳴集」の中で九首を「印象」という章にまとめられています。が、その中にこの詩の訳も含まれています。また、松尾芭蕉さんもこの詩を典故として二句を詠んでいます。

会津弥一訳

いりひさす

きびのうらはをひるがえし

かぜこそわたれゆくひともし

松尾芭蕉

あかあかと 日は難面(つれなくも) 秋の風

此の道や 行人(ゆくひと)なしに 秋の暮れ

「山行」(遠く寒山にのぼれば石径斜なり) 杜牧

「山の秋」

AKY訳

秋深き

ひとけなき山のぼりきて

石径いしみちはるかそのさきの

白雲くもの切れ間に人家見ゆ

そぞろあたりを観るほどに

楓の木々に夕陽映ほえ

燃える霜葉もみじは桜はなとも競うか

秋の暮れ

霜に打たれし紅葉は

春の桜はなにも劣らぬものを

「山行」

杜牧

遠く寒山斜石径

白雲生処有人家

停車座愛楓林晚

霜葉紅於二月花

(読下し文)

「山行(さんこう)」

杜牧

遠く寒山に上のぼれば石径斜(ななめ)なり

白雲生ずる処(ところ) 人家有り

車を停(と)どめて坐(ま)そぞろに愛す

楓林(ふうりん)の晩(くれ)

霜葉(そうよう)は 二月の花より紅(くれ)ないなり

「晩秋のさびさびした山を登っていくと、石ころの多いならかな小道が続いている。白雲の湧き上がるあたり、峯の近くに人家が見える。夕日に楓が映えている。車を止めて、ゆっくりあたりの風景を愛でていると、霜にうたれた楓の葉は、春の花よりも紅い。」

中国では、春の盛りの花は、真っ赤な桃の花だとそうです。私たち日本人の感覚だと、春の花といえば、桜です。紅くはないけれど、日本人にとって桜は特別。もつとも、紅葉の季節には、その桜に負けないくらい、紅葉見物に夢中になります。特に京都の紅葉の季節の混雑振りは、春の桜にも見事さも人出もけつしてひけをとりません。京都の紅葉は、関東に比べて少し葉が小さく、葉の数は多いように思います。発色も紅くてきれいです。

しかし、日本人の場合、桜の花より勝るとまでは、いふのは難しいでしょう。「競う」とか、「劣らぬ」で勘弁してもらおうことにしました。

杜牧（八〇三〜八五二）、字は牧之。晩唐を代表する詩人。二十五歳の若さで進士に及第、美貌で連夜妓楼に居続けするなど風流才子の名を残す反面、豪放磊落で、政治・軍事に精通していたともいわれる。杜甫を老杜と呼ぶのに対し、小杜と称される（岩波文庫、「中国名詩選」）。

〔参考〕他の方々の訳詩〕

「霜ニ打タレシ紅キ葉ハ」

松下緑訳

サミシキ山ノ石ノ路

登レバ秋モ極マツテ

白キ雲湧ク峯チカク

忽然トシテ人家アリ

車ヲトメテ暮レナズム

カエデ林ヲ賞デル目ニ

霜ニ打タレシ紅キ葉ハ

春ノ花ニモ勝リケリ

- 山行、山あるき、石径・小石の多い道。
- 寒山、人里離れたひっそりした山。下の降りる季節の山という意味も含まれていると思う。
- 白雲生処有人家、雲がかかっている山の上の方。そこまで上っていったのか、それとも、上を見上げたなら、雲の切れ間に人家が見えたのか。
- 車、唐詩画集には、手押し一輪車が描かれている。だとすると険しい上の方までは、上れないのではないか。
- 坐、そぞろに、なんとなく。
- 霜葉、霜に打たれて赤く色づいた葉、ここでは単にもみじとした。
- 二月、陰暦の二月は春の盛り。

「静夜思」(牀前月光を見る) 李白

「静かな夜」

AKY訳

寢室(ねま)にさす

月のひかりの明かるくて

霜かと銀光(しろい)庭のつち

仰げば遙か山影に

故郷(くに)が想われ

枕(まくら)つめる

(原詩)

「静夜思」

李白

牀前看月光

疑是地上霜

挙頭望山月

低頭思故郷

(読下し文)

「静かな夜の思い」

李白

牀前(しょうぜん)月光を看(み)る

疑(う)らくは是れ地上の霜かと

頭(こうご)を挙げて山月(さんげつ)を望(み)

頭(こうご)を低(た)れて故郷(こきやう)を思(おも)う

【参考】他の方々の訳詩】

「静夜思」

潜魚庵訳

子マノ内カラ月影ヲミテ
庭ニ落ちタル霜カトオモタ
山ノヲ月ヲアオノキ見レバ
国ノ妻子ガオモワレル

この詩には、他に松下緑さん、土岐善磨さんの訳があります。

「ツキヌオモイハ故郷ノコト」

松下緑訳

霜カトマゴウ月アカリ
旅ノマクラヲ照ラスカナ
マドノムコウハ山ノ月
ツキヌ思イハ故郷(くに)ノコト

井伏鱒二訳

ネドコニユクトキイイ月ガデテ
ニハハマツシロ霜カトミエタ
月ノヒカリヲミテイルト
ヒトリ妻子ニアタマガサガル
(昭和十年二月、随筆「中島健蔵に」)

「静けき夜の思ひ」

土岐善磨

とくにさす月影
疑ひぬ霜かと
仰ぎては山の月を見
うなだれては思ふふるさと

井伏鱒二訳

ネマノウチカラフト気ガツケバ
霜カトオモフイイ月アカリ
ノキバノ月ヲミルニツケ
ザイシヨノコトガ気ニカカル
(昭和十二年「厄除け詩集」)

この「静夜思」の訳は「田園記」には、掲載されては、いないものですが、潜魚庵さんの訳と井伏さんの二つの訳とが少しずつ変えられている様子がわかります。

「寝台の辺りに差し込む月の光、あまりの明るさに窓の外を見ると庭は土が白く光つてまるで霜が降りたようだ。顔をあげて、さら遠くの山にかかる月を仰ぎみているうちに、遠く離れた故郷のことが偲ばれて、自然と、うな垂れてしまう」。寝室、庭、遠い山月と、だんだん遠くの眺めに誘われ、そのうちに、はるか遠くのふるさとが思い出されてしまう。

井伏さんの訳詩は、昭和十二年厄除け詩集のなかに掲載されているのですが、昭和一〇年の随筆「中島健蔵へ」の中でもこの詩の別訳があります。大岡信さんによると昭和八年に書かれた井伏さんの「田園記」という随筆には、「亡父の遺品の中から発見された」として一〇編の訳詩が掲載されているが、これらは、「芭蕉翁五世孫 石州在潜魚庵稿艸」と奥付に書かれた木版本「白挽科」にある訳詩を下敷きに行っているというこトです(厄除け詩集中、大岡信「こんこんでやれ」)。

潜魚庵とは、江戸時代石州(島根県太田の俳人中島魚坊(一七二五〜一七九三)さんのこと)です。

「酒人某出扇索書」(一杯人が酒を呑み) 菅茶山

「一杯人が酒を飲み」

AKY訳

「一杯人が酒を飲み

三杯酒が人を呑む」

誰かにそれを聞きました

銘ずべしとは思いつつ

(原詩)

「酒人某出扇索書」

一杯人呑酒

三杯酒呑人

不知是誰語

我輩可書紳

(読下し文)

「酒人某扇を出して書を索もとむ」

一杯人が酒を呑み

三杯酒が人を呑む

是れ誰の語か知らざれども

我輩は紳(しん)に書す可し

暁遊詩集九編中、唯一日本人の作だが、単に面白いと思っただけで、代表というわけではありません。

菅茶山(一七四八〜一八二七)は、江戸時代の儒学者、備後の国で私塾黄葉夕陽村舎を起し教育に従事するかたわら二千四百首もの優れた漢詩を作りました。頼山陽も、菅茶山に師事していたことがあるそうです。

この詩は、菅茶山が、酒席で酔っ払いに何か書いてくれと扇子を出され、仕方なく書いたものといわれています。最後の「紳に書す」以外は、特に説明も不要でしょう。

紳とは、身分の高いものがしめた礼装用の大幅の帯のこと、ちなみに「紳士」とは、紳を縮めるような身分の高い人の意味。「紳に書す」については、論語に「子張諸ヲ紳ニ書ス」とあります(衛霊公編)。孔子が弟子にいろいろな訓戒を長々と行ったので、弟子の一人、子張は、それを忘れないように自分の着物の帯に書き付けた、それで「紳に書す」。

我輩といっているけれど、本当の気持ち
は、酒飲みの「お前は」ということ、松下さんは、おそらく、酒飲みを「ご自分のこととして」「呑んべは」とされたのではないかと思えます。私は、さらに意志弱く「銘ずべしとは思いつつ」。

松下さんは、「サヨナラダケガ人生力」の中で、この詩に関連してお母上から聞かされたという明治の頃の救世軍「断酒同盟の歌」というのを紹介されています。救世軍の制服を着た信者たちが、楽隊の伴奏に合わせて「おたまじゃくしはかえるの子」のメロディーで歌いながら行進するのだそうです。面白いので参考としてご紹介しておきます。ちなみに「おたまじゃくしはかえるの子」の原曲は、「リパブリック賛歌」として南北戦争での北軍の軍歌で奴隷解放を歌ったものでした。救世軍の人たちとしては、酒飲みを酒の奴隷としてその解放を意図したのかもしれません。またこの曲は、ニューオリンズでは、「ジョン・ブラウンの亡骸」という葬式のように演奏される曲でもあったので、「あわーれ、あ・わ・れ」のくだりは、「しまいは、あの世行きだぞ」と、おどしているともとれますね。

【参考】他の方々の訳詩

松下緑訳

ハジメハ人ガ酒ヲ呑ミ

シマイニ酒ガ人ヲ呑ム

誰ノ言葉カ知ラネドモ

呑ンベハ肝ニ銘ズベシ

参考

おたまじゃくしは蛙の子のメロディーで

「断酒同盟の歌」(救世軍)

はじめは人が酒を飲み

中ごろ酒が酒を飲み

しまいに酒が人を呑む

哀れ(あわーれ) 哀れ(あ・わ・れ)

わかつちやいるけどやめられない凡人の
我々としては、「銘ずべしとは思いつつ」、今
日もまた「呑む」。

「照鏡見白髪」(宿昔青雲の志) 張九齡

「昔は、大きな夢も見た」

AKY訳

昔は、大きな夢も見た

いつしか白髪が増えました

鏡に映るわが形影(すがた)

皺(しわ)のそれぞれとおしい

(原詩)

「照鏡見白髪」

張九齡

宿昔青雲志

蹉跎白髮年

誰知明鏡裏

形影自相憐

(読下し文)

「鏡に照らして白髪を見る」

張九齡

宿昔(しゆくせき)青雲の志

蹉跎(さた)たり白髪(はくはつ)の年

誰(たれ)か知らん明鏡(めいけい)の裏(うら)

形影(かたち)自(み)ずから相(あ)い憐(れ)むを

この詩は張九齡全集である「曲江集」に、「照鏡見白髮聯句」として収められています。が、「唐詩選」には、掲載されていません。聯句とは、数人で一句ずつ、あるいは、二句を受け持って、詩を作るものですが、誰とこの聯句をつくったのか、また、どの部分を張九齡がつくったものかも、明らかではありません。

張九齡(六七八〜七四〇)は、広東省出身。則天武后の頃、進士に及第。玄宗皇帝に認められ、中書令(宰相)にまで上りました。その後左遷され余生をもっぱら文学に親しんだといわれていますが、そのような人がこんな詩を作るだろうかというので、本人の作かどうか昔から議論になつていているということです。

とはいえ、人生の哀歎を詠んだいい詩だと思います。

ところで、この詩の第四句「形影自相憐」の「憐」をどう読むか、ここにその人の人生観が表れるような気がします。この詩には、松下緑さん、井伏鱒二さん(潜魚庵さんも)の訳の他、会津弥一さんの和歌もあるのですが、「憐れむ」の解釈で二つに分かれるようです。

「憐れむ」には、文字通り哀れに思う、かわいそうに思うのほかに、いとおいしい、可愛いの意味があります。井伏さんの訳詩は、ご覧のとおり、潜魚庵さんのものとそっくりで、どちらも、自分の人生を否定的に、哀れんでいるものとして訳しておられる。こちらには、会津弥一さんも組んでいます。

一方、松下さんは、結果はともかく、自らの一生を懸命に生きた証としての白髪とみているのでしよう。「憐れむ」をいとおいしいと訳された。わたしも急速に増加しつつある白髪については、「いとおいしい派」です。

「その他、この詩で使用されている言葉」

- 宿昔、むかし、以前。
- 蹉跎は、躓くさま
- 形影、我が身と鏡に映った姿。「形影自相憐れむ」については、鏡を覗き込む私自身の姿を想像して「しわのそれぞれ」としてみた。

【参考】他の方々の訳詩

「鏡に照らして白髪を見る」

会津弥一

あまかけるころろはいつくしらかみのみだるるすがたわれとあいみる

潜魚庵訳

出世シヨウト思テ居いたゾヤ
トカクスルマニトシヨリマシタ
ヒトリ鏡ニ向テミレバ
シワノヨツタガアハレデゴザル

井伏鱒二訳

シツセシヨウト思ウテキタニ
ドウカウスル間ニトシバカリヨル
ヒトリカガミニウチヨリミレバ
皺ノヨツタアハレムバカリ

松下緑訳

ワガ若キ日ノ夢ハテテ
歳月トミニニ白ミタリ
カガミニウツルワガ髪ヲ
ヒト知レズコソイトオシム

「贈喬侍御」(漢庭巧臣榮え) 陳子昂

「白髪頭の監査役」

AKY 訳

「へんちやらスタッフ出世して

武骨の一線かやのそと」

ものいう白髪の監査役

思いのたけを誰か知る

「贈喬侍御」

陳子昂

漢庭榮巧臣

雲閣薄辺功

可憐聡馬史

白首為誰雄

(読下し文)

「喬侍御(きょうじぎよ)ニ贈ル」

陳子昂(ちんすこう)

漢庭巧臣榮え

雲閣辺功を薄(うと)んず

憐れむべし聡馬(そうば)の史

白首誰が為にか雄(さか)んなる

「漢の時代以来、出世するのは、世渡り上手な役人ばかり、一線での功績は軽く見られがちだ。聡馬史と呼ばれた恒典にも比される喬侍御史殿、白髪が目立つ年齢にもなつて、なんでそんなに意気盛んなのですか（誰も認めては、くれないのに）」

実は、白髪頭の喬侍御は、侍御史で、しかも祀山烽という辺境の要塞に勤務していたのですから、監査役というよりは、「辺功」（一線の指揮官）の方です。元の詩も喬侍御に「なんで、そんな歳になつてまで、一線で働くの？」と語っているのです。

作者の陳子昂は、朝廷の体質を指摘しなければならぬ右拾遺ですから、監査役に近いのは、彼自身です。しかし、松下さんは、不祥事の続く現代の企業社会への警鐘、または、風刺の意味で、敢えて侍御史を監査役と訳されたのだと思います。

松下さんの訳は、監査役自身が、言うべきことは言わなければならぬと思いつながら、内心自分の首を心配しているとも、「あんなことまで言つて、自分の首は大丈夫なの？」と周りが心配しているとも取れます。

確かに「いうべきことをいう」というのは、大変なことです。首を心配するかどうかは別にしても、その間、心のうちでは、いろいろな葛藤があつて、結果として、（いうべきことを）いったとしても、いわなかつたとしても、その本当の気持ちは、それこそ、「誰にも自分自身を含めて）わからない」のではないかと思います。

陳子昂（六六一〜七〇二）は、唐の詩人。二四才で右拾遺（拾遺は、天子を諫める役職）につき、しばしば天子を諫めたが聞き入れられず、職を辞して郷里に帰りました。が、のちに県令の讒言に逢い投獄されて憤死したといひます。

この詩は、唐詩選では、「題祀山烽樹贈喬十二侍御（祀山烽に題して喬十二侍御に贈る）」という題になっています。喬侍御は、侍御（侍御史の略、檢察官）の喬知之のこと、喬一族で年齢が十二番目の男という意味で喬十二郎と呼ばれたのです。祀山烽は、現在の甘肅省にあつた辺境の要塞。この詩は、陳子昂が出張して、ここの檢察官だつた喬侍御に会つたときに詠んだものです。

「この詩で使われている言葉」

- 漢庭は、漢の朝廷、唐の朝廷を直接批判することを憚つた。
- 雲閣は、正式には雲台、平仄の為の呼び変え。後漢の明帝のとき建てられ、建国の功臣二八人の肖像を展示した。
- 巧官は、世渡りのうまい役人、
- 辺功は、前線の将士の功績。
- 白首は、白髪頭・老人。
- 聡馬史は、漢代に剛直な侍御史と知られた恒典のこと。権力者の非違を容赦なく弾劾して恐れられた。いつも聡馬（黒毛と白毛が混ざつた馬）に乗つていたので、聡馬史と呼ばれたといふ（岩波文庫、唐詩選による）。

「世渡り巧者方出世シテ」

松下 緑 訳

世渡り巧者方出世シテ

現場ノ氣骨ハキラワレル

勇マシイノハ監査役

白髪ノ首ガ氣ニカカル